

民主化闘争情報

No. 848
2012年1月26日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

東労組の暴力的運動の象徴である浦和電車区事件の刑事裁判も、最高裁の判断を待つのみとなっている。この間、東労組は、口頭弁論を開かせるために210回にも及ぶ最高裁への要請行動を行っているが、職場の東労組組合員からは疑問の声があがっている。

組合員からブーイングの東労組「反弹圧の闘い」！ 職場から遊離するばかりの美世志会運動は何処に？

『ZAITEN』2月号に「社員がめったに辞めない安定職場・JR東日本」と題する記事が掲載されている。この記事は、有名企業の職場環境・給与明細などを紹介する「企業ミシユラン」というコーナーに掲載されたものだ。取材に応じたプロフェッショナル採用の30代社員は、JR東日本の採用方法、社員構成、仕事内容、給与、昇進など多岐にわたって述べているが、その中で労働組合(東労組)について以下のように語っている。

組合費は高いです。1人あたり年間7万円を超えます。しかも、その支出の内訳が、ちゃんと公表されないんです。確かにうちの労組の組織力はすごい。組合員数4万8000人超もいる主要労組の「JR東労組」のことです。今は浦電の事件(浦和電車区事件)に労力の8割を使っている感じですね。

この事件は、02年に、強要罪の疑い(労組が退職を強要した、とされる)でJR東労組の大宮地本副委員長ら組合員7人が逮捕されて、JR東日本側は6名を懲戒解雇処分としたのですが、それを不服としてJR東労組が戦っているんです。もう、何のことだかわからないで駆り出されている社員も多い。現在、最高裁で争っていて、9割がた負けているのですが。

『週刊現代』は06年、JR東労組が革マル派の支配下にあるとして「テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実」と題した連載を半年間にわたって掲載しましたが、現場社員としては、休みを半強制的に潰されるのに迷惑しています。具体的には「うちの現場から10人、この日に」というように、幹部から割り当てられるわけです。「月曜日、傍聴券獲得の仕事があるんだけど、行ってくれない？」とか言われると、若い人は絶対断れません。

裁判が進行中のときは、2週間に1回は、やってみましたね。私も10回は「傍聴券の当たり取り」に行きました。実際の傍聴は、労組の幹部が行くんです。ウィークデーに有休を使って行って、2時間くらい並ぶわけですから、休みを返して、という感じ。

それ以外に、組合の「政策フォーラム」などのイベントにも動員されます。現場にいると毎月、イベントがあるイメージです。JR東労組以外にも、「国労東日本」、「JR東日本ユニオン」など少数派の労組があって、たまにパワハラなどイジメにあった人が助けを求めて移って加盟する人もいますが、昇進では、会社側から明らかな差別を受けます。国労の人は50代でも、級が新人と同じ2級や3級だったりしますから。

浦和電車区事件の幕引きを図る東労組?! ついに「反弹圧の闘い」も終焉か？

東労組の生命線である「反弹圧の闘い」の内実は、この30代プロフェッショナル採用社員が「何のことだかわからないで駆り出されている」「9割がた負けている」「休みを半強制的に潰されるのに迷惑している」「休みを返して」などと赤裸々に述べているように、現場の組合員からは全く遊離したものとなっているのである。

こうした職場の実態を知ってか知らずか、東労組千葉委員長の年頭の挨拶では、なぜか浦和電車区事件について一切触れられていない。また、『旬刊ACCESS』第313号のインタビュー記事で、石井副委員長は「考えてみれば浦電事件が起こってから、労使関係もギクシャクしてきましたので、そんなことも頭に入れて、これからのことを考えなくてはならない」などと、上告棄却後の“拳の振り下ろし方”を念頭に置いたかのような発言をしている。

いずれにしても、JR連合は『あるべき労働組合像・労使関係像』に基づき、現場組合員に依拠した労働運動の“王道”を歩むのみである。